

● 単元の流れとメディアルームの利用

日常生活の中での生き物との関わり

春：植物には花や小さな芽がつきはじめ、動物の姿も見られるようになる。特に池の中のザリガニの存在や、卵を産んでいるカエルやオタマジャクシの存在は魅力的で、捕まえて教室に連れてくるようになります。

※世田谷小学校では、生物の様子に自然と目が向くように、校内の環境を整えています。例えば、自然観察路を整備したり、草刈りを行わない雑草園のような場所を設けたりしています。また、池などの水環境も整えることで、多様な動植物に目を向けられるようにしています。結果として、生物の多様性が確保されるとともに、生物が子どもたちにとって身近な存在となっています。

他にどんな動物や植物が、見つけれられるかな？

わたしも生き物を、捕まえてみたいな！

**世小の生き物
博士になりたい！！**

捕まえてきた生き物を飼うには、どうしたらいいのかな？

【理科】世小の生き物博士になろう

～世小の生き物 MAP を作ろう！！～

タブレットを一人一台もって、学校の中で生き物探しの探検を行います。見つけた生物は、動物と植物に分けて共同編集アプリ上にある校内敷地図に貼り付け蓄積していきます。

※共同編集アプリはMetaMoJi社の「ClassRoom」というアプリを活用しました。観察カードを描くのとは異なり、動きの激しい生き物や、捕まえるのがためられる生き物（カメムシ等の不快害虫等）も、写真を撮るだけであれば生き物が苦手な児童も積極的に活動することができます。

情報が蓄積されるに従って、自分がよく知らない生き物も多数発見されていきます。そのような生き物であっても、生き物好きな児童は教室に連れて帰り、飼いたいと言い始めます。そして、自然と教室に生き物が溢れ、生き物が苦手であった児童にとっても、生き物が身近な存在になっていきます。

動物がたくさん見つかった場所は、植物もたくさん見つかったりね。関係があるのかな？

この生き物は、ここにもいたんだ！

この生き物の名前はなんだろう？

メディアルームの利用

● 興味・関心を引き出す手段として

子どもたちの活動に合わせて、関連する図書の紹介を行ったり、子どもたちが興味をもっている生き物に関する書籍をそろえたり、学校司書との連携を図ることで、子どもたちはより積極的に生き物についての学習を進めていきます。

国語科の指導との連携では、「ひろがる言葉 小学国語 3年上（教育出版）」に掲載されている『「発見ノート」を作ろう』や「本で調べよう」、「生き物のとくちょうをくらべて書こう」「俳句に親しむ」「きせつの言葉を集めよう-春・夏-」に加え、朝の時間などで紹介した「のはらうた」等も挙げられる。

● 問題を解決する手段として

生き物の名前を調べたり、飼い方を調べたりする上でメディアルームの活用は必要不可欠です。特にインターネット上にあふれる情報の中から、自らの必要とする情報を選ぶ力や、その情報が確かなものかを判断する力が十分ではない児童が多くいるであろうと考えられる第3学年の児童にとっては、メディアルームにある書籍は安心して触れさせることのできる情報といえます。

問題解決のプロセスを教師の手ではなく、児童の手によって主体的に進めさせていくためにも、百科事典や図鑑などを積極的に活用できるように指導していきます。

【理科】～動物のすみかをしらべよう～

※詳細は「H30年度夏の教育研究セミナー」の資料を参照

生き物の体の中は、どうなっているのだろう？

カマキリには、いろいろな種類がいる。どうやって見分ければいいのかしら？



発表しよう！！

【総合】「世小の生き物博士になろう」で

学んだことを発表しよう

→藤の実フェスタ(学習発表会)

自分たちが取り組んできた活動の発表の場です。

※児童一人一人が、自分の興味をもった生き物について追究を行ってきた発表の場として藤の実フェスタがあります。発表に向けての取組の中で、同じクラスの仲間が自分の持っていなかった視点で生き物を追究していることを知り、自分もその視点で調べてみようとなつた新たな問題を見いだしていきます。また、発表を通して様々な質問を受ける中で、より博士らしくあろうと、問題を見いだしていきます。